

シベリア抑留記

新潟県 大津 正 晴

昭和十九（一九四四）年十一月下旬、召集令状を受け世田谷区にある野戦重砲隊に仮入隊し、四、五日後どこへいくとも知らされず、夜渋谷駅より軍用列車にて出発、東海道線を一路西へ向かいひた走った。夜が明け名古屋駅でお茶など接待を受け、なおも列車は走り続け、到着した所は門司港、ここで下車。バラック建ての兵舎で出港を待った。

当初の予定より二、三日遅れて出港。玄界灘を渡り、上陸地は朝鮮半島の釜山港。船の中で暦は師走に変わり、開戦三年目十二月八日になっていた。釜山から鉄道に乗り込み満州の牡丹江を目指しての出発でした。現地で配属された所は満州第七五八九部隊、三カ月の教育期間中、無線通信の基礎知識技術などを叩き込まれた。その後、配属が変わり車両の整備員となりました。

昭和二十年八月九日、異様なほど飛行機音が響き渡った。牡丹江の町がソ連の空軍により爆撃されたとの情報が届いた。私達は車にネットをかけ、その上に草や木をかぶせ敵機からの目を逃れようと作業を必死でやった。私達は無線部隊とあって、車と列車で一斉に移動を開始したのはその日の夜であった。朝鮮半島に近い敦化町で合流、飛行場の格納庫で数日を過ごした。そして八月十五日終戦を知ったのはこの格納庫の中、五球のスーパージャオが日本の敗戦を伝えていた。その夜ソ連兵達がジープで乗り付け周辺にいた私達隊員が集められた。その後ソ連の監視下で武装解除などでテント生活の始まりだ。実はこのテントの中でシベリア行の順番の来るのを待たされていた訳です。逃げようとしても逃げられるものではなかった。

十月上旬、目的地東京城に向かっていよいよ出発。一週間程の行軍で約二百五十キロを歩かされた。夜は相当に冷え込んだ。薪を拾い集め火を焚き、毛布を二人一組になって包まれて眠った。朝

になれば再び歩き出す、その途中目にしたものはまさにこの世の地獄、あちらこちらに横たわっているのは紛れもなく日本兵の敗戦の悲惨な姿であった。第一の目的地である東京城に到着、列車に乗せられた。「海だ」誰かが叫ぶ。だがそこはバイカル湖、列車は駅舎などない松林の中に停車、ここで下車させられ、雪のある林の中を一キロ程歩かされ、その日からテントでの生活が始まった。

工事に回されました。松の木を伐採して木道を作ったり、盛り土をして枕木を敷いて行く作業でした。その後作業が変わり鉄道作業となり、時には早朝、夜間と労働が続いたが、ソ連兵に時計を取上げられ時間は全く分からない。今は何時なのだろうか見当もつかなかった。一緒に働いていた仲間達が一人また一人と死んでいく。それは酷寒の中、強制重労働、食糧不足による栄養失調のためである。俺が死んだら家族に知らせてくれと住所の書かれた紙片を託された。

「いよいよ日本へ帰れるらしいぞ」そんな噂が

伝わり始めたのは昭和二十三年、すでに終戦から三年が経っていた。やっと帰れる、私は心の中でつぶやいた。確かに日本への帰還はすでに始まっていたが、それは全員が一斉に行動を開始するものでなかった。その枠は狭く一回につき二、三人班長を中心に帰還についての協議があり、結果、妻や子供のいる人達から先に帰さなければならぬということになり、私は二十三歳の独り身でしたから、また周りの人達もそうした意見で妻帯者を優先的に送り出しました。結局帰ったのは昭和二十四年、私達の地区では最後の最後でした。収容所を出る前収容所の周りに有刺鉄線を張り巡らせ後にした。入れ替わるようにソ連の囚人が入って来ることになっていたと言う。

八月上旬頃収容所を後に、私達が労働させられ完成した鉄道で貨車に乗せられ、二十日間もかかってナホトカ港に到着、迎える船の来るまで数日間待ち、ナホトカ港出港、八月二十五、六日頃だった。

遠州丸に乗り込むとき持ち込み許可されたのは雑のうと飯ごうだけ、あとは着の身着のまま、友人から託された住所など書かれた紙片も没収された。

船は舞鶴港に接岸、復員はその年の九月二日。抑留生活四年。抑留中、作業開始前に大隊長よりの訓示で、祖国日本に帰るまではシベリアの松の肥やしとなつてはならぬという言葉が今も脳裏から離れない。

戦後五十数年が過ぎた今日、酷寒、異国の地で今なお祖国に帰れず眠っている多くの友人のご冥福を御祈り致し、私のシベリア抑留記を終わります。

私の生きた大正 昭和 平成 七十九年

富山県 山本 祥 作

私は大正十四（一九二五）年五月七日生まれで、農家では忙しい月であった。

春から秋夏冬と大へん忙しい地方である富山県高岡市（旧射水郡佐野村）西佐野で、父「佐七郎」母「ちよ」の四男として生まれた。八人の兄弟で、私は七歳にして昭和六（一九三一）年三月母親は亡くなった。昭和七年小学校入学して昭和十五年高等科二年の卒業が間近になったある夜、暗い裸球のともる囲炉裏の端で、家族そろって夕ご飯を食べ終わると、父（生産組合長）が、皆に相談があると話を始めた。いま日本の重要な国策の一つに満州の建国があり、この大陸の新天地で活躍する満蒙開拓青少年義勇軍を募集されている。家では六人の男の子がいる、「二人でも」義勇軍に行き国策にこの話でありました。その頃は、学校では、